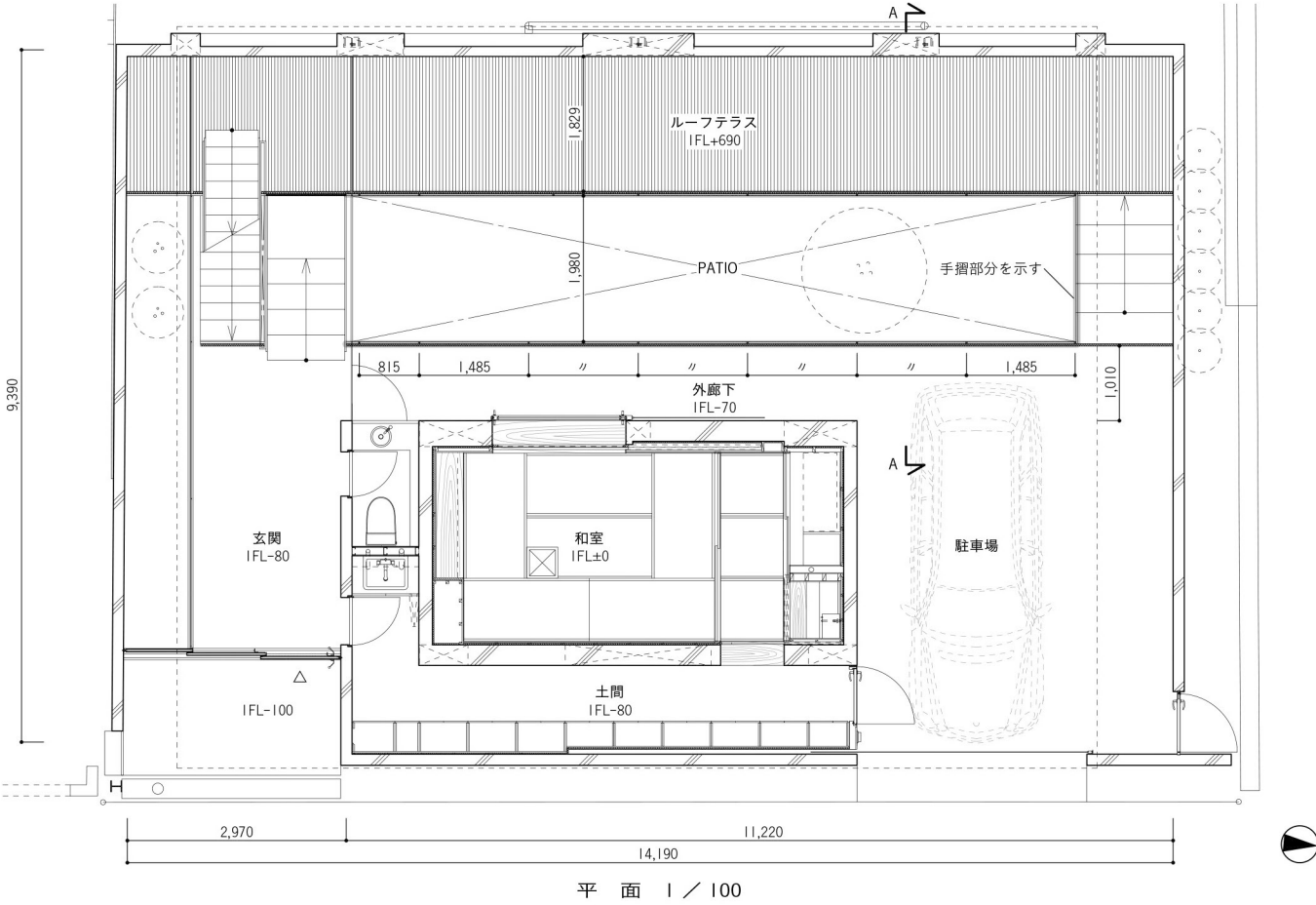


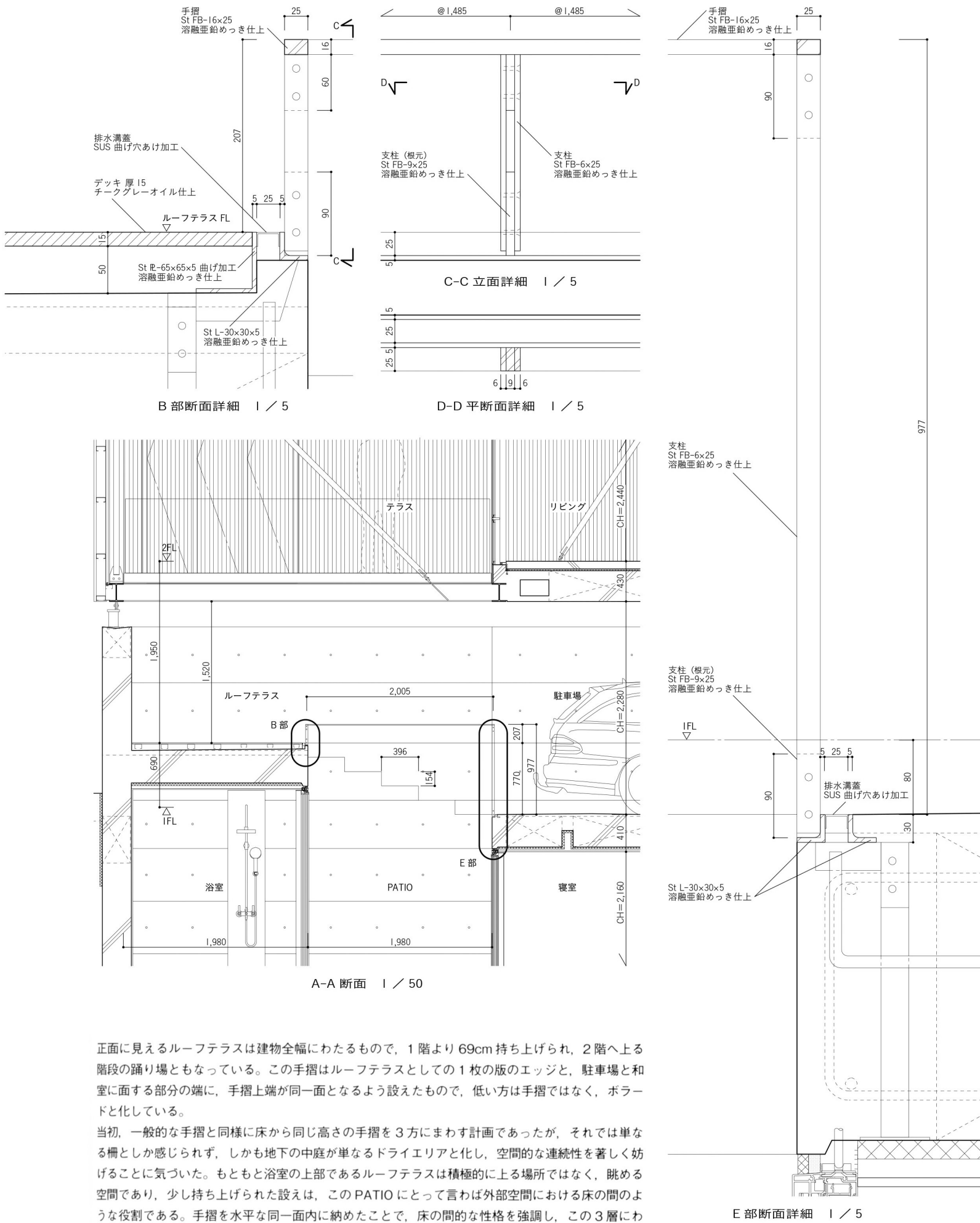
PATIO を空間化する同一面の手摺

PATIO 矢板建築設計研究所

構造設計／構造設計社 施工／日南鉄構 手摺製作／日南鉄構 竣工／2011 年 11 月 所在／東京都 撮影／小川重雄



平面 1 / 100



正面に見えるルーフテラスは建物全幅にわたるもので、1 階より 69cm 持ち上げられ、2 階へ上る階段の踊り場ともなっている。この手摺はルーフテラスとしての 1 枚の版のエッジと、駐車場と和室に面する部分の端に、手摺上端が同一面となるよう設えたもので、低い方は手摺ではなく、ボードと化している。

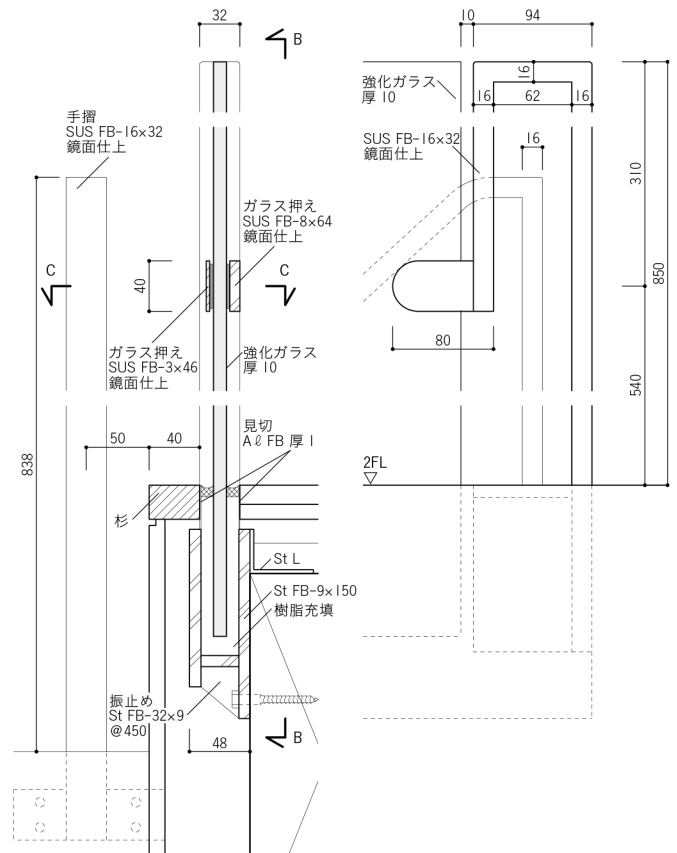
当初、一般的な手摺と同様に床から同じ高さの手摺を 3 方にまわす計画であったが、それでは単なる柵としか感じられず、しかも地下の中庭が単なるドライエリアと化し、空間的な連続性を著しく妨げることに気づいた。もともと浴室の上部であるルーフテラスは積極的に上る場所ではなく、眺める空間であり、少し持ち上げられた設えは、この PATIO にとって言わば外部空間における床の間のような役割である。手摺を水平な同一面内に納めたことで、床の間的な性格を強調し、この 3 層にわたる PATIO を一体の空間とすることができたと思う。

(矢板久明)

動作と空間の要としての手掛け

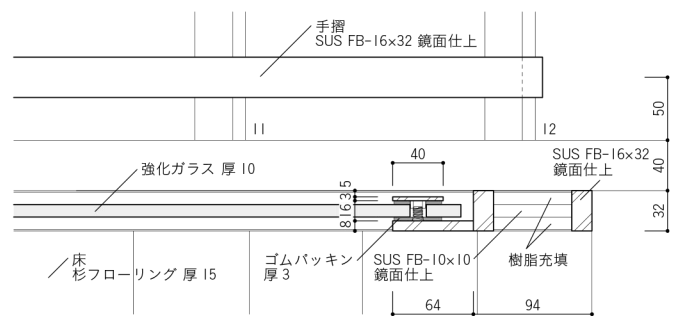
八雲の家 矢板建築設計研究所

構造設計／構造設計社 施工／日祥工業 手摺製作／川越工業 竣工／2011年8月 所在／東京都目黒区 撮影／新建築写真部

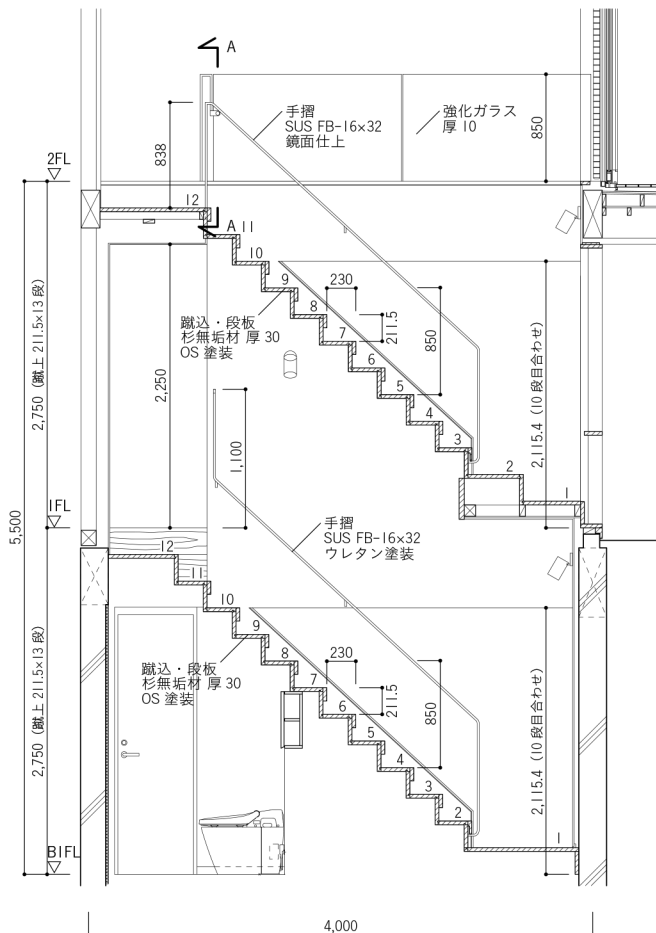


A-A 断面詳細 1 / 6

B-B 立面詳細 1 / 6



C-C 平面詳細 1 / 6



断面 1 / 60

この手摺は、階段を上りきった2階部分にあり、強化ガラス手摺の端部にステンレスのフラットバーの手摺が取り付けられたものである。このガラスと並んだステンレスの手摺は、現場の終盤になり、階段部分の斜めの手摺が取り付けられた後、急遽追加した経緯がある。この階段は上りきった部分が床面から1段下がった位置に踊り場状の段として終わっており、傾斜部分の手摺高さが2階床からだと低すぎ、階段へ回り込みながら下りる際の手掛けとなるものが必要なのことがわかった。

そこで、下りる際の体の回転の中心になるよう、ガラス手摺の端部に、スチールのポケットに樹脂を充填して取りつける方法で、手摺と同じバフ800番の鏡面仕上げとしたステンレスの無垢材の手掛けを追加した。その結果、動きの中心となる手掛けとしての機能だけでなく、空間の重要な要となってくれた。(矢板久明)